78 分に、途中交代ではあるが公式戦初出場を果たした島田。この試合の活躍は今後の試合も期待を抱くものとなった (撮影・川崎篤彦)

駒澤大学1 ×1 日本大学

終了間際に怒涛の反撃 意地で掴んだ勝ち点「1」

チーム内の意識改革

「どこも打倒駒大で来る」と牧野が言うように、前期を首位でターンした駒大に対する締め付けが後期初戦から露になった。これは日大の試合に対する意識の持ち方が物語っていた。数字的にも駒大はシュート数は14本を打っているのに対して日大は、本数は少ないものの決定的なシュートで終わらせ、結果的にその決定機を生かし先制点も挙げている。日大が決定機を大切にしたのは前期での最小失点8を記録している駒大DFの壁の厚さを見せ付けられているからだ。簡単に点を取れる相手ではないという意識が日大にはあったからこそ、決められるところは確実に決める意識があったに違いない。ここが駒大との意識の差があり、日大の方がこの面で上回っていた。完全に駒大を意識したプレースタイルであった。駒大は日大陣内に攻め入るものの攻撃の展開の途中でやられてしまう形が多く、納得のいく攻撃ができずに苦戦していた。これも駒大攻撃陣の怖さを思い知らされたからこその日大守備体制であった。だが、その戦法を打ち砕いたのが途中交代で公式戦初出場のルーキー島田であった。交代直後から島田は持ち前の粘り強さを前面に出したプレーで日大DFをかき回し、島田に手を焼いていたのが見てとれた。その結果89分島田からのCKに筑城が頭で押し込み劇的な同点劇を演出。徹底的に駒大を研究していた日大も未知の相手には対処しようがなかった。「自分のイメージ通り飛んでいってくれたので嬉しかった」(島田)と言うように鮮烈デビューアシストであった。このように島田が活躍したことにより、チームの士気が高まったことは間違いない。「試合に出ることが一番の目的」(島田)、「先発にしろ途中からにしても自分のできることを常に考えて、次も出場できるように練習から頑張りたい」(笹岡)などのコメントからわかるように、今の駒大は明らかにチーム内の競争も激化している。競争が激化することでチームの活性化にも繋がり、長いリーグ戦を勝ち抜くための原動力のなることは言うまでもない。

(永田 博義)